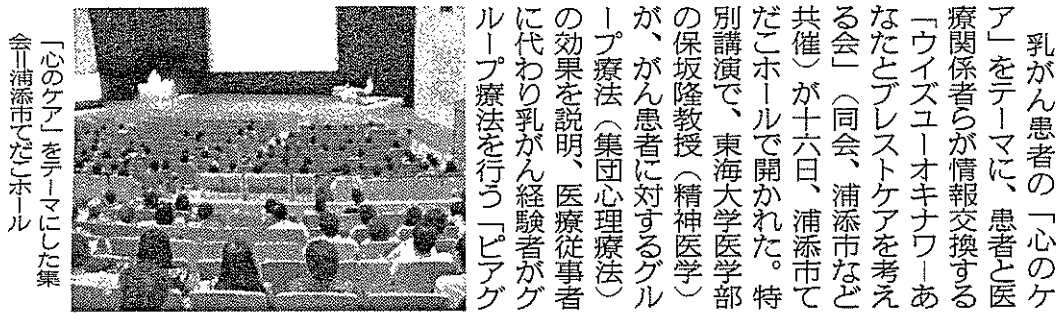


患者の「心のケア」重要

浦添市乳がんテーマに集会



「心のケア」をテーマにした集
会。浦添市でたこホール

乳がん患者の「心のケア」をテーマに、患者と医療関係者が情報交換する「ウイズユーオキナワ―あなたとプレストケアを考える会」(同会、浦添市など共催)が十六日、浦添市でたこホールで開かれた。特別講演で、東海大学医学部の保坂隆教授(精神医学)が、がん患者に対するグループ療法(集団心理療法)の効果を説明、医療従事者に代わり乳がん経験者がグループ療法を行う「ピアサポート」の重要性を指摘した。

保坂教授は、通院患者の10%、入院患者の20%がうつ病を患っているが、ほとんどの患者の担当医がうつ病を診断できないという調査結果を挙げ「多くの患者が、本人も、周りの人もうつ病と気付かずにQOL(生活の質)が低下した毎日を送っている」と現状を説明した。がん患者についても「落ち込んで仕方がない」との考えがあり、うつ病が見落とされることを指摘した。

その上で、海外で実施された調査を例に、ソーシャルサポート(社会的支援)がある患者ほど、がん治療後の経過も良くなることを説明。グループ療法は患者同士が知り合う場も提供し「結果的に、患者がソーシャルサポートを得やすくする」と利点を説明した。

約三百五十人が参加。講演の後には、抗ホルモン治療、再発への不安などのテーマごとの分科会もあり、より具体的な意見交換をした。

沖 縄 タ イ ム ス

2009年(平成21年)5月20日 水曜日

闘病へ心のケア大切

保坂教授が乳がん講演



保坂隆教授

約3割がうつ病を合併 ■ 患者家族の支援も重要

は、がんの経過に好影響をもたらすとした。また、県内患者会の会員がそれぞれの思いをアピールした。

保坂教授は、海外での研究データから、闘争心を持ちがんと闘おうとする場合に比べ、「もうだめだ」とあきらめてしまう場合はその後の経過が悪いと指摘。

さらに、がんへ前向きに対処するためのグループ療法を受けた人の方が、受けていない人よりも長生きし、再発も少ないことも分かっているという。がん患者の約3割がうつ病を合併

乳がんについて、患者と家族、医療従事者が共に語り合う「With you」OKINAWA2009(主催・同実行委員会、宮良球一郎代表世話人)が16日、浦添市でたこホールで開かれた。東海大学医学部の保坂隆教授が「心のケア」をテーマに講演。

病気に立ち向かう意欲

しているというデータもあり、うつ病は免疫機能を低下させることから、心のケアの大切さを説明。その力を引き出すために、家族や友人、主治医、看護師ら「ソーシャルサポート」の重要性を指摘した。患者家族への支援の必要性へも言及した。また、患者会活動

にかかわる当事者13人が登壇し思いを語った。「患者と医療者との垣根を取り払ってほしい」との声が上がったほか、抗がん剤治療中の人も離島から駆けつけた。「正しい情報を伝えたい。早期発見の大切さを自分が体験している。みんなで声を掛け合い、乳がん患者を減らしていこう」と訴えた。

患者の体験談募集

NPOびんく・ぱんさあ

NPO乳がん患者の会「びんく・ぱんさあ」(与儀淑恵代表)は、患者の体験談や思いを伝える冊子の作成のため、当事者の声を集めている。与儀代表は「乳がんと闘っている人に、あなたは一人ではないと伝え、誰にも話せないでいる人には、あなたのひとことが誰かの勇気になると伝え冊子で一人一人をつなぎたい」と話す。詳細はびんく・ぱんさあブログ、<http://pinknsabre.ti-da.net/>